木野会報／創刊号　発行日／平成５年10月10日　発行／京都精華大学同窓会木野会　編集／同窓会報編集委員会　印刷／土山印刷株式会社

同窓会木野会会報発刊のご挨拶

京都精華大学同窓会木野会会長　赤坂　博

68P

同窓生の皆様方にはお元気でご活躍のことをお慶び申し上げます。

一九八八年十一月、第一回木野会設立総会が準備委員の方々の努力により開催されて、五年が経ました。この間の主な活動は会員数の拡大を軸として、組織、位置付け、会則の見直し、卒業者名簿の整理等、会の基礎作りを中心におこない、一方では卒業生の親睦を深めることを目的に、毎年、木野祭に合わせ十一月三日に総会と懇親会を実施してまいりました。

また、昨年八月十六日には会の五周年記念事業として、全卒業生、大学教職員の皆様に呼びかけ第一回合同同窓会を京都都ホテルで催しました。お盆で忙しい日であったにもかかわらず多数の皆様にご参加いただき盛会裏に終えることができました。皆々様の会への関心の高まりに役員一同感謝しております。

また設立当初から懸案事項であった会費の徴収方法については、従来の卒業生に対する協力の呼びかけとともに、本年度から会費予納金として入学時に預かる方式に大学の協力によりおこなうことになりました。

これにより会活動は継続的、計画的に運営することが可能になりました。

大学は今年創立二五周年を迎え、一万数千人を超える卒業生が社会で活躍されています。

一九六八年、「自由・自治」を創設の基本理念に短期大学として開学し、教職員の方々の熱意により自由主義、民主主義を実践する個性的な教学の方針の美術学部、人文学部の複合大学へと発展してきました。しかし、一八歳人口が大幅に減少し、大学が受験者に選ばれる時代を迎えた、今、教育内容の独自性、質の高い教育の場を提供する大学として、社会に支持されるか、また企業のように数の拡大、効力を求めることで経済的な生き残りの方策を選ばなければ存続できない状況にあります。

京都精華大学が創設の精神を守り、育て社会に求められる大学として発展確立するためには、教職員の方々の情熱と共に卒業生の皆様の社会でのご活躍がなによりの支援だと考えます。

木野会は卒業生の独立した主体的組織として、私たちの母校として誇れる大学に発展することに寄与できる会として育成しなければならないと考えております。

卒業生の方々の活躍は、日本にとどまらず、広く国際的になっています。

去る九月五日には東京支部設立のため、東京渋谷「フォーラム8」で首都圏地区在住の皆様を対象に同窓会を開催したところ多数の方々にご参加をいただきました。

また、ニューヨークで活躍の方からは、ニューヨーク支部の設立を要請いただいております。今後は会活動の活性化と、皆様方相互の親睦を深め、コミュニケーションを活発にするための場として中国、四国地区等各地での支部作りを積極的におこなってまいりたいと考えております。

一方、拡大と広域化して発展してゆきます会の組織、運営においては、どなたでも気軽にご参加いただき、民主的であり、また社会的信頼に耐える会作りをめざします。

微力ではございますが、できる限りの努力をしてまいりたいと考えております。

皆様方のご友人にも声をかけていただき、会が大きく発展するよう今後ともご理解、ご協力をお願い申し上げます。

吉本で活躍中のチャランポランの大西君（79P）も駆け付けてくれました。

大学と卒業生の発展的関係を祈念して

京都精華大学学長　柴谷　篤弘

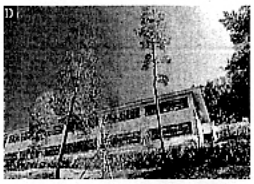
本年、一九九三年は、京都精華大学にとって記念すべき開学二五周年の節目にあたり、大学としても、組織・制度上や記念事業としても、大きい刻印を大学の歴史の上に残す年になりました。この年に、京都精華大学の同窓会が、将来にむけての大きい発展を目標に改組され、その基盤を確立し、同窓会誌を新たに発行するように成熟してきたことは、まことに嬉しく心強いことでもあります。

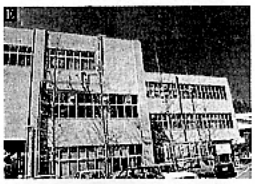
いまさら言うまでもないことですが、世界も日本もこの一九九三年にむけて、ひとつの大転換を用意していたかのようです。従来見慣れ、考え慣れてきた国際関係、国内政治などの枠組が、急激に、急速に変わってゆくのを、だれもが感じています。保守的な観点に立てば、世界と日本の将来は予想できない、ということになりましょうし、大きい変革を夢見ている人にとっては、まさに千載一遇の注目すべき時期に来ている、というべきでしょう。しかもこの「千載」という表現は、単にことばのあやではなくて、世界歴史の分析の上でも、しっかりした実在感をもつ表現です。端的に言えば、これまでの世界・人類文化のありかたを定めてきた近代文明の枠組が変わってゆく、五〇〇年を周期とする大転換の時期で、その向うべき方向を、われわれがこれから創造しなければならないのです。

このような大転換の時期に合わせるようにして、日本の大学は未曾有の変革の時期に来ており、本学も好むと好まざるとに関わらず、その方向に進まねばなりません。日本の私学を支えていた政治的・経済的・社会的な基盤もまた、根本的な転換を余儀なくされるでしょう。

このような時期に、大学はその存立を支える環境との間に大きい変化を経験するでしょう。しかし、どのような大変動があろうとも、大学にとっては、ひとつの不動の関係があります。それは卒業生との関係です。この関係は大学が存続するかぎり、維持され、発展してゆくものです。それは、言い換えれば、この大変革の時期に、大学が確実にその相互関係を大切にし、相互依存の関係をのばしてゆくべき対象です。

このように重大な時期に、このように重大な関係について、京都精華大学同窓会の再創立があったということは、大学にとって極めてめでたいことであり、木野会とその会員の皆様の今後の大発展をお祈りします。





A 風光館（ビジュアルコミュニケーションデザイン・マンガ・建築・陶芸）
B 7号館（洋画・立体造形）
C 5号館（日本画）
D 春秋館（人文学部・講義室・演習室）
E 2号館（版画・テキスタイルデザイン）
F 光彩館（テキスタイルデザイン）
G 流渓館（人文学部研究室・演習室）

CAMPUS REPORT

『思い出すままに』

京都精華大学
企画室　杉本修一

精華二五年略史

【創立期】

初代学長の岡本清一先生は、新しく出発しようとする短期大学の建学精神を次のように宣言された。

「われわれの大学は新しい画布（キャンバス）のように、一切の因襲的な過去から断絶している。そして教師も学生もすべて、まず人間として尊重され、自由と自治の精神の波うつ新しい大学を、これから創造していこうとしているのである。……すでに形骸に化した学問の自由と大学の自治を回復し、教職員と学生がともに人間として尊重され、その人間的自由と自治の拡大が図られる大学を、われわれは目指している」（一九六八年　大学案内より）

開学当初は岡本先生を囲み教職員・学生が信頼の輪で結ばれ、この岩倉木野の地にあたかも精華共同社会が実現したかのように思われた。学内は笑顔で満ち、学生の目は自信に溢れ生き生きとしていた。

まもなく大学の財政が困難におちいり、教職員の間で大学運営について意見の対立が生じ、岡本先生は学長を辞職されることになった。心なしか大学には悲しみの空気が流れていたように思えた。

われわれは本学の歴史から現実的（経営）視点と理念（精神）とのバランスが必要だということを学んだ。

▽一九六八年（昭和四三年）四月、京都精華短期大学は英語英文科と美術科をもち、学生総数二一七人、教員二六人、職員十二人で出発した。校舎は本館、一号館、二号館だけの粗末なものであった。

第一回の入学式は国立京都国際会館で行い、当時立命館総長であった末川博先生より、この小さな大学に対して大きな期待をする旨の祝辞をいただいた。

▽一九六　　美術科に絵画とデザインに加えて染織コースを設置。

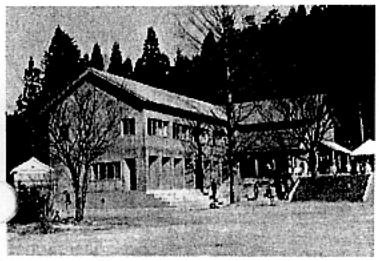
当時は全国の大学で学園紛争が頻発したが、本学でも「自由自治は幻想である」として学生が校舎の一部を封鎖した。

▽一九七〇年　両学科に専攻科を設置。

▽一九七二年　英語英文科にこれまでの英米文学・セクレタリー・貿易英語・ガイドに新しく国際文化コースが増設された。

▽一九七三年　美術科に立体造形コース、マンガクラスを設置。

▽一九七五年　伊谷記念朽木学舎がオープン。



【4年制大学設立に向けて】

短期大学開学当初から四年制大学設立が語られ、中でも美術科の教員と学生は署名をもって理事会に大学設立を要望した。

▽一九七九年四月に短期大学の美術科を発展的に改組して、京都精華大学美術学部を開学。学科は造形学科（洋画・日本画・立体造形）とデザイン学科（デザイン・染織・マンガ）を設置。一年生と二年生が入学。

同時に短大美術科の学生募集を停止。残念ながら当時の精華の力では、美術科を四年制にすることが精一杯であった。

この四年制大学設立に学長として大いに尽力された深作光貞先生が、ご存命でないのは誠に残念である。

同年、短期大学開学一〇周年と大学開学記念式典を開催。

▽一九八〇年　美術学部の『学外実習』制度がスタート。

▽一九八四年　丹後学舎オープン。

▽一九八五年　第一回グループリーダーズキャンプ実施。

▽一九八六年　施設整備総合計画発表。

▽一九八七年　造形学科に版画・陶芸分野をデザイン学科にアーバンリビング（建築）分野を増設。

▽一九八九年　短期大学英語英文科を改組転換して、人文学部人文学科

を開学。ようやく短大当時の二学科とも四年制大学として足並みがそろった。人文学部一年生に対して『洋上セミナー』を実施。短期大学英語英文科の学生募集を停止。

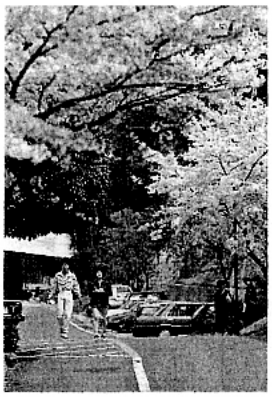
▽一九九一年　大学院美術研究科（造形専攻・デザイン専攻）開学。人文学部『フィールドワーク』実施。

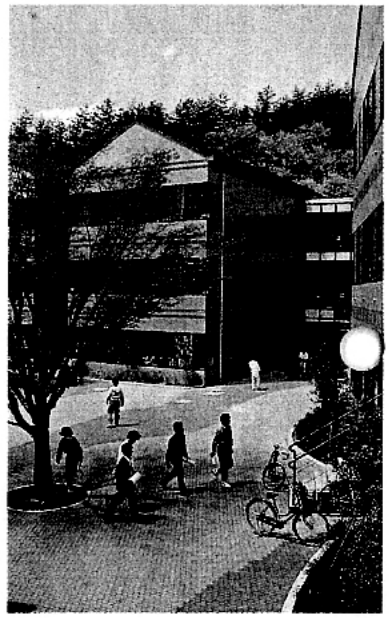
▽一九九三年　大学院人文学研究科を開学。

開学二五周年記念事業実施。

以上のように本学の歴史をふりかえれば、開学して約一〇年で四年制大学美術学部を、約二〇年で人文学部を、二五年目の現在はさらに大学院の二研究科を設置している。文字通り最高学府の体制をととのえることができた。

遅れている施設面も、二期計画が進行中で、三年後には図書館、厚生棟、講義棟、体育館、クラブ室棟、グラウンドが完成する予定である。





一八歳人口が急減し、大学の存亡が問われているとき、卒業生諸君が胸をはって母校を語れるように、われわれは一層の努力が必要だと考えている。

今日では、本学の卒業生が一万人をこえ、昨年の大同窓会開催に続いて本年は同窓会の東京支部が発足した。これを機会に卒業生と大学との絆はますます強くなるものと思う。

第一回の牛皮（後に和紙）の卒業証書には、岡本学長の起草になる文章が記されている。

あなたが京都精華短期大学において
友愛の精神を養い
本学所定の学科目の全てを
履修されたことを証し
あなたの前途を祝福して
この証書を贈る

一枚の証書に創学の精神をこめて、卒業生を送り出した姿勢が、いつまでも続いていくことを願っている。

京都精華短期大学と京都精華大学の25年

◆京都精華大学大学院

1993年4月1日現在

- 美術研究科
  - 造形専攻（入学定員10人）
  - デザイン専攻（入学定員10人）
- 人文学研究科
  - 人文学専攻（入学定員10人）

◆京都精華大学

1993年4月1日現在

- 美術学部
  - 造形学科（入学定員150人）
    - 洋画
    - 日本画
    - 立体造形
    - 版画
    - 陶芸
  - デザイン学科（入学定員150人）
    - ビジュアル・コミュニケーションデザイン
    - テキスタイルデザイン
    - マンガ
    - 建築
- 人文学部
  - 人文学科（入学定員300人）

◆1968年当時の京都精華短期大学

英語英文科　【入学定員100人】
（英米文学・セクレタリー・貿易英語・ガイドコース）

美術科　【入学定員50人】
（絵画・デザインコース）

※美術科は1979年に京都精華大学美術学部に改組
※英語英文科は1989年に京都精華大学人文学部に改組

CAMPUS REPORT

クラブ活動

「伝統の祭り」

軽音楽部

顧　問　武田雄二先生（VCD）
代表者　高橋星児君（陶芸三年）
部員数　八〇人

京都精華大学で最も歴史が古く、また部員数の多い文化系サークルである。「パンクからレゲエまで四季に応じた音楽活動」「自己満足のライヴではなく、観客と一体化して楽しむライヴ」をモットーとして、多彩な演奏活動をおこなっている。

年間の主な活動は以下のとおりである。五月祭・木野祭のステージ、京都のタクタク・大阪のベアーズといったライヴハウス、人文学部新人生歓迎キャンプ、岩倉自治連合会の夏祭のステージでの演奏等。

本学の同窓諸兄姉が学生生活を回顧する時、まず念頭に浮ぶのは大学祭ではないだろうか。セイカといえばマツリというイメージが定着しているが、他大学と違って、学生の大半が参加する年二回の祭を取り仕切り、演出するのは伝統的に軽音楽部の学生である。良きにつけ悪しきにつけ、軽音楽部が京都精華大学の雰囲気とイメージ形成に大きな役割を果たしていることは間違いない。

四半世紀の楕円球の軌跡

京都精華大学ラグビー部OB会幹事会

信じられようか？二五年前の精華は、グラウンドが食堂前のテントと図書館（明窓館）が建つ前の小さな広場であっ〇ことを。変形の七角形。砂利だらけ。体育の授業でソフトボールをするにも外野のない三角ベース。周囲は低い金網のフェンスで内野フライかゴロ以外は守備不能につきアウト。勿論、室内運動施設などあろうはずもなく、これでは運動クラブなど誕生するはずもない。

ではあまりポピュラーではなかった、あのラグビーボールがある時は数人、ある時はたった一人の学生によって高く蹴り上げられたり、ドリブルされたり、パスされたりしているではないか。この広場には『楕球を追うが如く』『精華ラグビー発祥の地』と刻まれた小さな石碑が遠慮がちに据えられている。

あれから二五年、グラウンドも新校舎建築のたびに転々、五回。思えばそんな中、二六〇余名の卒業部員たちが実に好、実に珍、そして快、惨、喜、悲、猛、粛、激、涙、笑、唱の数々の場面をそれぞれのグラウンドに刻み込んでいった。そして現在も四〇余名の現役部員が、力強く『精華ラグビー』の魂を磨いている。

二五年間の仮、仮、仮、〇…のグラウンドも九月に六度目の移転を迎えたが、依然として正規のグラウンドとはほどとおい。

詠み人は誰であったか、『ラガーらのそのかちうたのみぢかけれ』

二五年を一区切りとしてさらなる前進を期待したい。

京都精華大学のラグビーを心底楽しんだ仲間として……。

開催●ラグビー部創部二十五周年記念式典
日時／十一月十四日
場所／ホテルニューキョウト
全卒業部員・マネージャーはご参加ください。
詳細は〇七五・二二一・四八七五　佐藤まで

体育会系サークル

ラグビー部／サッカー部／アメリカンフットボール部／軟式野球部／硬式テニス部／軟式テニス部／バスケットボール部／バレーボール部／女子ソフトボール部／剣道部／空手部／少林寺拳法／太道部／卓球部／パラグライダー部／ヨット部／スキー部／ツーリングクラブ／ジャズダンス部／ワンダーフォーゲル部など

文化系サークル

軽音楽部／フォークソングクラブ／混声合唱部／吹奏楽部／マスコミ研究会／朝鮮文化研究会／社会科学研究会　／南アフリカ研究会／ボランティアクラブ／絵本研究会／英語クラブ／農耕研究会／広告研究会／手話サークル／漫画サークル／映画サークル／茶道部／華道部　／演劇部など

同窓会「木野会」の軌跡

宮城　明和（一九七七年英文）

一九八七年の暮れ、京都精華大学より卒業生へ送付された「木野通信」第十一号に同窓会設立の動きが記され、協力を求める案内があった。また、翌一九八八年三月、その年度の英語英文科の卒業生が中心となり、宝ヶ池プリンス・ホテルにおいて「卒業パーティー」が催された際に、過去の卒業生までもがその企画に協力し、その場では同窓会設立の要望が高まっていたという。

西暦	月	事項	参考事項
1988	4	第一回同窓会設立準備会 大学側からの同窓会設立の呼び掛けに応えた教人の卒業生が教職員を交えて懇談した。	
	7	第二回同窓会準備会	
	11	第三回同窓会準備会	
	9	第一回同窓会総会（設立総会） 卒業生の親睦と母校の発展に寄与することを目的に同窓会を設立。会長に赤坂博（一九六八年絵画）を選出。名称を「木野会」とする。併せて会則と会費（終身会費）一万円を定める。 第一回理事会 これ以後、年間数回の理事会および評議員会を開催	
1989	7	卒業生全員に入会案内を送付	
	11	第二回総会	人文学部開設（四月）
1990	11	第三回総会 東京支部の設立を承認。	
1991	6	大学名称変更に関する説明会 木野会の要望を受けて、大学が大学名称変更問題についての事情を説明した。	英語英文科廃止（三月） 大学院美術研究科開設（四月）
	11	第四回総会	
1992	8	第一回合同同窓会 京都ホテルにて開催。四十数名の教職員と約二五〇名の卒業生が参加した。	蜷谷眞弘氏（人文学部教授、生物学）学長就任（四月）
	11	第五回総会	
1993	4	大学に木野会の会計を委嘱。	
	9	東京支部設立総会開催 十数名の教職員と百名余りの卒業生が参加。支部長に高瀬哲（一九六八年デザイン）を選出。	大学院人文学研究科開設（四月）
	10	木野会報（名称未定）発行	

一九八八年四月、数名の卒業生と大学教職員のあいだで同窓会設立のための最初の会合が実現した。その後も教職員の方々の協力のもと、七月、九月、十月と続けて話し合いの場を持つことができ、最終的に設立総会を十一月三日に開催することにした。

総会は予定どおり開かれ、会の名称を同窓会「木野会」とし、会則と終身会費一万円が定められた。会長には開学当時の自治会長であった赤坂博（一九六八年絵画）が選出された。総会終了後には懇親会が催され、教職員、卒業生が互いに旧交をあたためあった。

発足当初はなにかと不行き届きがあったものの、その後の会の運営は順調で、一九九〇年には関東在住の卒業生から支部設立の要望の声があがった。会則に基づき理事会を経て、評議員会で承認後、初めて東京で会合が開かれ、総会においても承認された。一九九二年には一九八八年の設立準備総会から数えて五周年を迎え、八月に記念行事として初めて京都市内のホテルで合同同窓会を開催した。翌一九九三年九月、関東在住の卒業生の努力により東京支部設立総会が開催の運びとなり、会場にて高瀬哲（一九六八年デザイン）が支部長に選出された。

（木野会理事）

本山 裕子（87P）

SEIKA「大学名称問題の近況」

京都精華大学 企画室　松浦　逸郎

本学の名称は開学のときに諸般の事情があって自主的に選んだものではありませんでした。そこでかねてから教職員の間に名称変更の希望があったのですが、美術学部・人文学部の二学部に大学院を加える体制が整う機会をとらえて正式に名称変更を検討することになりました。

一九九一年秋に教職員一〇名、学生一〇名で構成される名称問題検討委員会（第三次）が発足し、一五回の会合を経て「洛北大学への変更」を学長に答申しました。

ところが、これに対して学内から「さらによい名称はないか」「美術学部の存在を名称に反映すべきだ」などの声があがりました。

学長はこれらの声にも耳を傾ける必要があるとして、美術・人文両学部教授会、事務局、学生自治会の四つの組織に意見を求めました。その結果、答申案の「洛北大学」はすべての組織で忌避され、別途教職員からは「京都芸術文化大学」、学生からは「京都創芸大学」が対案として提出されました。

この間学生諸君が自主的に展開した活動は誠に目覚ましいものでした。

このような流れの最終段階で、昨年来、教職員・学生から表明された意見書が公開されました。その多くは「京都芸術文化大学」に対する批判やいくつかの候補名称の復活要望でした。

以上の経過をふまえつつ名称変更問題に決着をつけることが今春以来理事会の課題となっています。しかし理事会は現在法人組織の改革など緊急の課題に取組んでいますので、結論は秋以降になる見通しです。

Kyoto Seika University

木野会東京支部長
高瀬　哲
68D

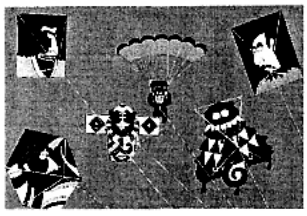
大学設立二五周年、大変おめでとうございます。これを機会に首都圏を中心に、東日本在住の卒業生約七〇〇名に、木野会東京支部同窓会の案内状を出し、九月五日（日）一四時～一七時、渋谷フォーラム8で開催いたしました。

出席数は、大学関係者十数名を含み約一四〇名の参加となり、盛大な会が実現いたしました。当日、受付のまわりは、各自思い思いの感情が表れ、異常な盛上がりを見せていました。先生の挨拶、各科ごとの記念撮影、懐かしい大学のビデオ。あっという間の三時間。その後、二次会八〇名、三次会二五名と、いつまでも離れがたい仲間たちが印象的でした。

この会の目的は、首都圏を中心に住む卒業生の正確な名簿作りと、仲間の情報が伝わる「かわら版」を発行することで輪がどんどん広がって行くことにあります。そのためにもアンケート方式を取入れ、われわれ仲間の手で作り上げます。今後も各支部が誕生することを願い、東京支部同窓会の報告とさせていただきました。

漫画家
笠松　洋
76D

一九九三年、夏。N・Yのソーホーにて、六月五日から二四日まで、「ナンセンス・カトゥーンズ・オン・スポーツ」と題し、個展を開催しました。



開催にあたり、同窓の牧浦知子さんに、いろいろと相談にのっていただきました。彼女は、渡米して六年になり、『ペースギャラリー』のデザイナーとして、勤務しています。彼女が仕事で付き合いをしている、デザイナーの石川高明さんとの話の中で、精華大学の卒業生であることを知り、「カッサンしってるか？」と尋ねると「良く知ってるよ」。「カッサンなあ、六月にソーホーで個展するよ」。そしたら、これを切っ掛けに、同窓会しようか」。「私、N・Yの情報誌に、呼び掛けの記事を掲載してもらうわ」。とんとん拍子に話が進んだようです。

私は、渡米前にその話を牧浦さんから聞き木野会へ連絡し「N・Y支部を、つくってきます」。と言い残して、渡米しました。

渡米してから、三週間たち展覧会の方は、想像以上に大成功でしたが、同窓会のほうは情報誌に掲載しても鳴かず飛ばずで、時間は過ぎて行きました。六月二一日、帰国一週間前に牧浦さんから連絡が入り、「六月二四日に同窓会やりましょ。場所は、ミッドタウンの『浪花』という居酒屋で時間は午後七時」。とのことでした。

二四日の七時。私は、胸踊らせながら『浪花』へ行きました。集まったのは、私たち夫婦を含めて、九名。関西弁が飛び交い、学生気分で、盛り上がりました。宴たけなわのおりに「今日来られた方々で、木野会・N・Y支部をつくりませんか」。と提案し、全員賛成で、N・Y支部連絡会が結成することになりました。染織卒業の辻本さんから「東部支部をつくるのも良いなあ。」ストン、シカゴなどにも、卒業生いると思うで、」などと言っておられ次々にアイディアが出ました。

会も終わり、のれんをくぐると、そこにはライトアップしたエンパヤー・ステイトビルがそびえ、ここはまぎれもなくN・Y。記念撮影をし、イエローキャブに乗り、皆マンハタンのビルの谷間に消えて行きました。

マンハッタンのアスファルトから木野会という芽が出たことを確認しました。

今回の出来事は、牧浦さん、石川さんの心から生まれたものです。異国の地で、卒業生に出会い、先生方の噂を現地のアーティストから耳にすることができて、改めて大学の大きさ素晴らしさを、実感しました。

今後、地球のどこかで、木野会の芽が出ることを願い、大きく育つことを期待します。

How Are Our Teachers? 先生はいま……

いっしょに笑う話

人文学部教授　鶴見　貞子

柳田国男が集めた『日本の昔話』（新潮文庫）は、今から六〇年あまり前、昭和五年に出版された。日本の各地方で、口伝えで残ってきたものを活字にした仕事である。その中のひとつを取りあげてみよう。

峠で茶店をやっている喜兵衛のところに、或る晩おそく、立派な身なりの旅の武士がやってきた。ところが、身ごしらえは調っているものの、「まだ一向未熟の狐だったと見えて、少し毛があって顔はとがっておりました。耳も三角で突っ立っておりました。それを自分では知らぬものだから、よく化けたつもりで、大そう威張っておりました」。喜兵衛は笑いをこらえて、ていねいに応待する。金だらいに水を汲んできて、お使いなさいましとすすめる。狐は顔を洗おうとうつむいて、水に映った化けきれていない姿に気づく。びっくりして声をあげ、茶店から逃げ出した。

「その次の日に、喜兵衛は一人で山へ木を伐りに行きました。そうして還って来ようとしていますと、出しぬけに林の中から、喜兵衛さん喜兵衛さんと、小さな声で呼ぶ者があります。姿は見えなかったけれども返事をしますと、喜兵衛さん、昨晩はおかしかったなあとその声が言いました。それじゃ昨晩の狐だなと、喜兵衛さんにはすぐわかりました。昔は狐でもこの通り正直で、人といっしょに笑うことができるものと、多くの山の人は思っていたのであります」。

（「狐が笑う」）

化けそこないを、まっすぐ相手に知らせるのではなく、笑いをこらえながら、狐が自分で気づくようにする喜兵衛のゆとりとユーモア。いっぽう狐の側は、飛んで逃げはしたものの、思い返すと、化けおおせたつもりで威張っていた自分の様子のおかしさに気がつく。自分を客観視できるのだから、この狐は高度の知性をそなえている。狐はさらに一歩踏みだして、このユーモラスな状況をつくり出してくれた相手方の喜兵衛に、翌日声をかけに行く。「昨晩はおかしかったなあ」と言って、笑いを共有するために。

この昔話が示す人間と動物のあいだのコミュニケーションの在りようは、宮沢賢治のいくつかの童話に見られるものと似ている。

たとえば「雪渡り」では、人間の子供四郎とかん子が、狐の子紺三郎と仲よくなり、雪の凍った満月の夜、狐の幻燈会にまねかれる。上映の主題はしくじりである。酒に酔った人間が、野原でおかしなものを、まんじゅうやそばだと思いこんで食べる。狐が人家に忍びこんで火傷をしたり、わなにかかったりする。人間と狐の両方が、それぞれのしくじりを歌いはやし、いっしょに大笑いする。

「狐が笑う」は美作（岡山県）に伝わる話だが、人間と動物の関係を描く上でこれと似かよった話は、美作地方に限らず、かつては日本各地にあったのではあるまいか。筋というほどのものはなく、明るくフワッと抜けてゆく話なので、印象は強くなかったかもしれないが。

宮沢賢治がどういう昔話をきいて育ったかはわからない。しかし、彼が人間と動物との関係をユーモラスに描いた作品では、このタイプの昔話とのつながりが見えてくるように思う。

玉井　司（70D）

「二枚の古い写真」

美術学部長　斎藤　博

先日、久し振りに手狭になった研究室を整理していたら、なつかしい写真が二枚でてきました。一枚は、青年四人が何やら楽しげに寄り添っているものです。田所さん、吉富さん、坪内さんそして小生の四人、皆驚くほどの若々しさです。これは多分、紅葉の一日福井先生のご招待で丹波へ松茸狩りに行ったときのものでしょう。赤松林に分け入り、負けずぎらいの私は夢中で駆けまわり、カゴいっぱいの松茸をさげて意気揚々と山を降りてきました。獲ったものはもらえるものと早合点、残念ながら出口で全部没収されてしまいました。松茸の入ったすき焼鍋を囲み、酔うほどに精華の将来について熱っぽく語り合ったことでしょう。カラオケなどない当時、吉富さんの発案でまじめな歌などハモっているなつかしい光景です。

陽が傾くころ、もう一つ楽しもうと、大きな溜め池で鯉釣りをさせてもらいました。物干しのようなごつい竿で糸を垂れると面白いように大物が釣れました。このころ、私には長男が生まれたばかりでした。母乳に良いからと、でかいのを一匹ビニール袋に入れて持たせてもらいました。さすがの鯉も長

旅には勝てずアップ、アップ。初めての子供のために死なせてなるものかと、風呂に水を張りなんとか元気をとりもどすことができました。あとはコイコク。母親はいとし子のために食べすぎてゲップ、ゲップ、若かったころをせつなく想い出します。その長男は二五歳になり、福井先生は、もうこの世にはおられません。

ご存知の人も多いと思いますが、精華大の入試には雪が降るというジンクスがあります。大雪のため定刻、試験開始ができず教職員全員が手分けして受験生に連絡をとった混乱。洋画の採点が終るのはいつも夜中を過ぎます。心身共に疲れはてて帰途につくのですが、いつだったか夕刻から降り出した雪が膝まで積り、食堂前の急坂を教員六人がそろそろと下るのですが、芝田、金田両先生に由里先生、森本さんに私。みんな結局はスッテンと滑って坂を下ったことを大変なつかしく思い出します。二枚目の写真は、真中に同窓会副会長の入江君が写っているから、短期大学できたてホヤホヤのころです。なぜ、みんなこんなに親しく、楽しげに笑っているのでしょう。杉本さんがベレー帽をかぶっています。シャベルを持った禅野さんが得意げですね。荒岡さんもいます。中央に置かれた荒けずりの雪だるまが、みんなの手で造った小さな大学の姿を象徴しているように思えます。二枚の古い写真に触発されて、創草期のささやかな思い出を少々書かせていただきました。

精華の二十五年

美術学部 人文学部一般教養
教授 荒岡 興太郎

早いもので精華大学がその前身の短大を含めてもう今年で創設二五周年を迎える。一九六八年に短大の美術学科、英語英文学科の二学科で出発したが、その後美術学科は四年制の美術学部に昇格し、英語英文科は学科名の変更を伴ったが、より総合的な四年制の人文学部に改組した。現在は美術、人文の両学部とそれぞれのマスター・コースを持つ大学院の総合大学です。

大学の構成員もすっかり変わってしまい、創設期からいる人たちは美術学部では学部長の斎藤先生、吉富先生、坪内先生、人文学部では鶴見先生と私、事務局では田所さんの少数派になっている。

二五年も同じ組織にいるとさまざまな歴史を思い出す。楽しかった思い出、苦しかった思い出、それらが走馬灯のように流れていく。

私の思い出の中ではやはり創設時の思い出が一番印象深い。学生数約一五〇名程度で出発したので、当時の学生の顔と名前はほとんど覚えていた。私は当時図書館に勤務していたので、学生の読書傾向まで知っていた。大学際では模擬店を開いても、その券を買ってくれる学生が少ないので、学生たちはしきりに事務局や研究室に券を売りに来て、田所さんは事務局の入口に冗談で、事務局内では券を売らないでください。というようなハリ紙を掲示したりしていたのを昨日のようにはっきり覚えている。また模擬店も学生と教職員が一緒になって開いていたりして、学生と教職員が一体となって何かをしているという雰囲気が見られた。

残念ながら現在の学生数は二五〇〇名弱で学生全員の顔や名前を覚えるどころではない。学生と教職員の一体感も薄らいでいるようである。しかし、まだこの程度の規模でも少人数教育は多少できていると思う。美術学部の九コースのそれぞれの学生はコースによって多少の相違はあるが、二五名程度でクラス分けがされ、その学年が四年間続くわけであるから、コース別にはかなり学生と教員の接触は密である。人文学部においても今年から「人文学基礎」という科目が設けられ、二〇名程度のクラス分けがなされている。そこで学生たちは一人の教員に大学でいかに学ぶかの学問基礎論が教えられるのである。

私学の場合、大学経営の問題があり、創設時のような全学的な少人数教育は不可能である。しかし、〇人数二五〇〇人になっても、少人数教育の精神とメリットを生かせる教育は今後も続けていきたいと考えている。

女子寮の風呂

事務局 藤井 義昭

僕は女子寮の風呂に、なんと二度も入ったことがある。

一九七〇年四月の市原寮オープン前の準備で慌ただしいころ、ほとんど毎日のように寮に出向いていた。

片づけが一段落したある日の夕刻、僕は新装になった浴室に立っていた。浴槽にはなみなみとお湯が張られている。今日も終わった。さあ大学に戻ろうかという矢先に「フジイセンセイ！風呂に入っていかはったらどうですか」と寮母の小田さんの声。二〇代半ばで独身の僕は一瞬耳を疑ったが、考えてみれば、ここ一週間ほど銭湯にいっていない。しかも、寮生はまだ誰も入寮していない。「この千載一遇のチャンスを逃してはならじ」とばかり、ご相伴にあずかることにした。

町の銭湯並みの広さを持つ湯船に、たった一人でどっぷりと浸かり「これで銭湯一回分儲けた」等と呟きながら二度とないであろう「女子寮の風呂」の感触をかみしめていた。

そのころ聞いた話。一九六〇年代の学

生運動活動家の一人で京大入試の数学の得点が全学部を通じてトップだったという男。当時の活動家の例に洩れず相当むさくるしかったのだろう。体中が匂っていたかもしれない。たまりかねて尋ねた友人に対してこの豪傑「パンツなんて、前、後、表、裏、一ヵ月ずつ穿き変えていたら、洗濯せんでも一枚で四ヵ月もつ」と日うた。現在は大証一部上場の有名食品会社の社長と聞く。

僕が、思いがけぬところで風呂にありつけたことの幸せの意味がご理解いただけたと思う。

次回もある日の夕刻。静思寮での寮会に出席すべく時間を見計らって少し早めにでかけた。当時の寮会は、午後十時の門限を過ぎないと寮生全員が揃わないということで十時過ぎからの開会が通例になっていた。

何度かは付き合っていたが、さすがにあるときからは、もう少し早めてくれるよう寮長に頼んでいた。

このときは七時か八時の開会だったろう。一時間位前に着いて寮母の大江さんと雑談していたとき、ごく自然に風呂を勧められた。

「毎日、夕方六時には湯をはっているんですが、寮生は制作やらバイトで帰るのがいつも遅いんです。門限ぎりぎりに帰ってきて、それからバタバタと入るのが常ですから今頃は誰も入りゃしません」

寮では入浴の順番を待つのに個人個人の風呂桶を脱衣室の前に並べて置くのだそうな。見れば一つもない。

しかし、今回は前の市原寮の場合と訳が違う。現に寮生が生活しており、少数とはいえ彼女たちの姿が炊事場や洗濯場で散見されるときにである。さすがにこのときは僕も躊躇したが大江さんの「ここで私が見張っているから」というご親切な勧めについ甘えてしまったのだ。

静思寮のそれは、今までに入ったことのない「桧の風呂」だった。

かくして僕は二度も「女子寮の風呂」に入浴する栄に浴したのである。

静思寮の大江のぶさんは昨年永眠されました。ご冥福をお祈りします。

市原寮の小田稲子さんは舞鶴市近くの特別養護老人ホームにてお過ごしと聞いています。

二つの寮とも、この三月で閉鎖され、二五年の歴史を閉じました。

懐古的心情

就職課　佐藤　正幸

同窓会というと数多くの卒業生の名前や顔が浮かんでくる。具体的なシチュエーションと共に思い出す場合も少なくない。年次が〇ほどその度合いが強いように思う。

また、精華の特徴のひとつだと思うが、卒業生諸君はよく学校を訪ねてくれる。今も交際が続いている卒業生も多い。正直にいって、ときには経済的にシンドイこともあるが、年に何度か結婚式に招かれる。

懐古的心情。年のせい。それもあるかもしれない。

永い間野球部の顧問におさまっていること。ラグビーやバスケなどのクラブの面々とのつきあいが多かったこと。基礎ゼミを何年間か担当したこと。アルバイトで長期間助けてもらったこと。留学生諸君と接する機会が多かったこと。それらも一因かもしれない。けれども少し違うように思う。

私自身、創立四年目の一九七一年六月二一日から勤務しているから二二年目になる。永いようであり短いようでもあるが、振り返ってみると、七～八年毎に三段階に分けられるように思う。

第一期は、紆余曲折はあったが、熱気や積極的姿勢が躍動していた。私自身はとくに魅力を感じてきたわけではなかった。大学時代の恩師岡本清一先生（初代学長）がおられたこと、田所伴樹さん（現本学入試広報課長・ラグビー部顧問）と名古忠行さん（現山陽女子短期大学教授・大学同級生）が誘ってくれたからである。

今のように難しい試験や厳しい競争もなく、着流しで祇園に行き、いっぱいやって、それで終りだった。正直にいって、三年くらい働けば義理は果たせるか、と思っていた。ところが、けっこう言いたいことを言い、やりたいようにやれ、おもしろかったから、ついつい流連けて今日に至っている。

第二期は、美術が四年制に改組されるころを中心とする時期である。第一期の余韻は残ってはいたが、新しい専攻の開設、教職員の就任、英語英文科と美術の円滑さに欠ける関係など全体としての雰囲気に変化が見られた。

第三期は英語英文科の人文学部への改組に象徴される。組織改革、制度改定など進行中であり、判断・評価にはいま少し時間が必要である。

かつて精華は実にコンパの多い学校であった。参加者は専攻やゼミ、クラブなどを超えていた。教職員と学生、また教職員・学生それぞれの間に濃いつながりが存在していた。教職員、学生それぞれの「思い」が交錯していた。卒業生の多くはそれぞれの"思い"をひきずりながら、今社会で活動している。冒頭の思い出や関係はこうした状況が基礎になっている。

私学は「構造的不況業種」である。昨今は「大学のリストラ」が声高に叫ばれている。精華は二五年を経て何を引継ぎ、何を捨てようとしているのか。その将来が、同志社大学や京都芸術大学になることにあるとは思えないのだが。

卒業生諸君の熱い提言に期待します。末筆ながらみなさんのご健康とご活躍を祈ります。

「モウ突進」　笠松 洋（76D）

Who's Who

◆飛翔する卒業生達◆

Take a chance, and have a good dream!

沖　和子（旧姓　古城）　68E

昨年の夏、京都都ホテルにて同窓会に出席、二〇数年ぶりの学友との再会に胸をふるわせて、特に当時、寮生であった私たちには会わずにいても心身を共にした結びつきは特別なものとしてあるようなそんな思いを胸に、時の流れを逆流させてストップしたかのように当時がよみがえってきて、和歌山出身のモンちゃんや金沢出身の山内さん、九州出身の森さんや岡山出身の浅尾ちゃんたちには会えなくて、とても残念でしたが、主婦業、喫茶店経営、化粧品店経営、塾の講師、テレビ局勤務やインテリア・コーディネーターとそれぞれ分野は違っていても、精華生として、とても身近に感じ、いつまでも交友を深めていきたいものと改めて認識しました。

当時の岡本学長さんともお会いできて、体は老いても長きにわたって書物をお書きのご様子でいつまでも心の情熱をお持ちで嬉しくなってきました。一九六八年度の精華大は、私の目には画期的で、もの新しくチャレンジ精神旺盛な大学として、とても魅力的なものでした。何もかもが建設中の中で、人間が未知のものを求め、模索し、探り求める魅力にこの学校を選択し今思えば良かったと思えます…。ウィスコンシン州出身の留学生であったキャッシーと九州半周旅行もいい思い出となっています。

一つ反省するとすれば故・柳島先生や、深作先生の情熱、かつ個性的な授業をもっとまじめに勉強すればよかったなと思うことです。

後輩の皆さんに一言、Take a chance,and have a good dream!

それでは皆さん、お元気で、地方からこられてがんばられている方も……。

September Club

中村　美和子（旧姓　田中）　68E

私は初年度の入学生で、長谷川先生は、二年目に英語英文科の講師として、本校にお入りになりました。以来、冗談で私の方が先輩である旨、おっしゃっておられます。その年、長谷川研究室で、日本語の本を読み日本語で話し合う読書会が発足したのです。当時、学校も創設されたところで、学生にとってゆとりの場所もなく、先生方の研究室へ、よくお邪魔したものです。数名いた読書会のメンバーも、卒業を機に、専攻科へ進んだり社会人となったりで、その後は、衣笠の長谷川先生宅で、続行されることになりました。私自身卒業二年後に英国滞在二年を経て、再び読書会のメンバーに加わりました。その後長谷川先生ご自身が滞英されて、ご不在の期間は、拙宅で読書会を続けておりました。先生が精華に戻られてからは、精華出身以外の仲間も加わり、そして、常に誰かが、いろんな事情で渡英・米・欧と、いつも送別会や歓迎会をしておりました。先生がご帰国になったとき、せっかく英語を話せるものが集まっているのだから、英語を読み、英語で話そうと提案され、そのとき以来、先生のお宅へ一歩入るや、英語の会話が始まるようになりました。読書会とはいえ、前半はそれぞれの近況報告や国際情報の交換等々、皆がおしゃべりを楽しんでおりました。だから決められた本を読んでいなくても参加できるわけです。九〇年春に先生が、ご家族ともどもSheffieldへ移られることを、引越先の二軒茶屋のお宅で伺ったときは、淋しい反面、先生らしいご決心だと思いました。かくして創始者である先生は行ってしまわれました。さて残された読書会、精華卒業生三名、関連仲間三名いたのですが、先生がいらっしゃらなくても続けようという総意の元で、でも女性ばかりなので、その特色をいかしながら、日本語の本も読書範囲に入れ、でも英語で話すことにして、以来、天声人語の英訳版や、上野千鶴子やオノヨーコ著等々。実際に皆が興味のある対象を選んでいます。その仲間の一人が昨秋、Sheffield大学での聴講生として渡英しました。今夏よりLondonに移ったとかで、目下、帰国後の彼女の話を皆で楽しみにしています。ときどきは、native speakerに来てもらったり、昨夏も、私の仏国の友人に加わってもらい、労働基準や文化の違い等話してもらいました。その少し前、現在スイス在住の元メンバーが一時帰国をして、現地の興味深い話を聞かせてくれました。昨年は会の半分は読書会でなく、free talkingのパーティーでした。私は唯一、一九六九年以来のメンバーなので、できれば自然体でこの読書会（名称をSeptember Club）が存続することを願っています。この会誌をお読みの皆さんも私たちと一ヵ月に一度英語で話してみませんか。私自身卒業後二〇年余り、消え入りそうな英語で頑張っています。興味のある方は左記へご連絡ください。〇七五・四六一・四一二六　中村美和子まで

西宮から、吹田から、高槻から、京都の白梅町に集まっています。

念願アトリエ建築、ツリはいつ？

内田　晴之　73S

卒業してから早くも二〇年近くがたちました。皆様いかがお過しですか。今年は念願のアトリエを建てるべく、お正月返上で大工さんを始めました。完成は予定の三月を大幅に遅れて五月も末。「完成したらのんびりとつりに行くゾー」。とかいいながら日曜返上でガンバッたのに、予定は未定でつりはチョン。今度は遅れた制作をとりもどすべく、夏休み返上の悪戦苦闘もすでに八月も末となってしまいました。ただ今追込みの真っ最中、九月中にはなんとか仕上げて、今度こそツリダーと予定しているのですが……。

「桃源郷」
安部　尚平

80S

僕が精華に在学していた時代は、三回生になって七号館が完成して新築の立体造形の教室へ引っ越したころです。木野駅の前の山がモヒカンがりになってしまったのもこのころの出来事でした。卒業して一〇年残念ながら大学を訪れる機会もなく故郷で過ごす日々です。誰もが思うことかもしれませんが、自分が在学していたときが一番良かったと思ってしまうものです。街で学生っぽい人を見かけると自分の学生時代をなつかしく感じてしまいます。桃源郷という言葉がありますがまさしく精華はそれに似た存在でした。僕たちのように美術学部で実技をやっていた者にとっては制作、作品との「にらめっこ」みたいな毎日で社会のいろいろなことから遠のいてしまって（学費を気にしながら）、自分はやってるぞ！と夢中になっていたようです。今から思うとそれも良かったと思うのですが……。結局、僕は大学を出て教師になったわけですが、世の中での生活が始まりました。職場だけにかぎらず社会にはあちこちの桃源郷から出てきた連中がいるわけで、考えていることもいろいろと違います。大学で四年間学んだ美術でも、人によっては「ええ趣味ですね！」と一言で終わってしまいました。それから一〇年好きなように、また思うようにできないときもあったりして今になりました。自分の作品づくりについては、まだまだ勉強不足です。家（マイホーム）もまだ買ってませんが二人の子供にめぐまれました。結婚してパパになったのです。奥様にもめぐまれたのでは…？と思われるかもしれませんが、実は奥様は精華の同級生なんです。❤だからそうもいえないのです。まあ、こんなところでございます。

おあとがよろしいようで！

「はい！マイチケットです」
釣田　美香

89L

「はい！マイチケットです」。この言葉で私の四月は始まった。今年三月に無事に京都精華大学人文学部を卒業し、旅行代理店マイチケットに就職した。私がこの会社と出会えたのは、精華大学にいたからだと思う。そしてマイチケットが社会派の旅行代理店（と私は考えている）だからこそ精華の教職員の方々に利用してもらっているのだと思う。

マイチケットを紹介してくださったのは、現在国際交流課にいる鹿野さんである。私が一般的な就職活動に疑問を持ち相談をしたところ、マイチケットの話をしてくれた。とにかく直接話を聞いてみることにした。マイチケットの山田さんは、庶民レベルでの国際交流をもっともっと発展させたいという理由で旅行代理店を始めた。山田さん自身南米に日系人の歴史を調べに行ったり、ニカラグアへスタディツアーを企画したり、フィリピンで地方の農村に滞在するフィールドトリップをしたり、またハワイの原住民と交流をしたりと世界のさまざまな土地に訪れている。私はその活動のキーワードは「人権」という言葉に集約されていると思う。私はマイチケットでなら仕事をのびのびとできるような気がした。

四月一日から私は大阪のマイチケットのオフィスで忙しい日々を送っている。社会人になって初めて見えてくる世界を興味深く観察している。大学が今から思えば限られた世界だったと感じるときもある。学生を卒業して納得できる職場で社会人として働く機会を得た私はラッキーだっただろう。ベテランになると、仕事をしているとき頭は世界中をかけまわっているそうだ。私もいつか世界中を旅して回りたいと思う。

厳しさを経験して、信頼と感動
斉藤　博子

86E

私は、一九八八年三月に京都精華大学を卒業し、四月に東京証券京都支店に入社いたしました。今現在入社六年目になります。就職活動のときは、やはり金融機関でその中でも銀行や証券会社などで営業的な仕事がしたいなあと思っており、東京証券なら、同じ大学の先輩もたくさん行っておられるということだったので試験を受け、縁があって入社することになりました。

さて、私の仕事は銀行の窓口のように証券会社のカウンターで、来店されるお客様の入出金の手続きをすること、そしてプラス東京証券で扱っている有利でお得な貯蓄商品をお客様におすすめして資金を導入することです。

私が入社して一年二年目の二年間は、証券全盛期、株もどんどん上がり貯蓄商品もみるみる売れていく状況でした。毎日八時九時まで残業し、祇園祭の宵山さえも、外のおはやしが聞こえる中、お祭り気分さえなれず、遅くまで残業したことを覚えています。証券貯蓄商品にはたくさんの種類がありますが、以前は証券会社は株屋さんというイメージがお客様には強かったのですが、この時代は個人のお客様がどんどん積極的に証券貯蓄にも興味を持たれ、資金が流れてくる状況でした。

ところが九十年（入社三年目）湾岸戦争が始まり株が暴落、九一年（入社四年目）には証券不祥事が発足、バブルが崩壊し株が大暴落、一九八九年と比べてすべての株が、二分の一か三分の一の値段になるという状況でした。毎日お客様からの苦情の電話が入り、文句を言われ、私たち証券レディにとっては、本当につらいつらい日々でした。どんな業界でも良いときがあれば、悪いときもある、まさにそのとおりです。良いときと悪いときの差が大きすぎる業界です。このように両方の時代を経験して、忍耐力と精神力が身についたように思います。また、会社の社長さんとか、普通の仕事をしていたのでは知り合えないような方々とも、対等に話ができたりして社会のことをより多く知ることができました。そのときはつらかったけど、今となっては両方経験できていい人生勉強になったと思います。

まだまだ今も不景気な世の中ですが、少し上向きになってきました。このような厳しい状況の中でも、お客様が自分を信頼してお金を預けていただいたときの喜びは忘れられません。この感動を胸に抱いて今後もますますがんばっていきたいと思います。

我庵は…

道場　利次

74S
81S

朽木村は、京都の北に位置する。二十年近く前、初めて、立体の合宿でやってきたが、そのとき、この地に、住みつくことになろうとは、思いもしなかった。京都の町中がいやになり移り住んで、一年半、今は、田を借りて米をつくり、畑を耕やし、好きな焼き物を造る、仕事に疲れた、サラリーマンの夢のような暮らしである。京都より一時間ちょっとで、二mの雪が積もり、熊やイノシシの出る、そんな所である。人によっては不便というが、住めば都、もう、町中に、もどれなく、なってしまった。「熊の出るような所によう住むなあ」。とよくいわれるが、「熊も住めん所でよう生きとるなあ」。とやりかえしてやる。実際、夏の京都の水道水を飲めば、熊もいやがるような気がする。今はこの地が私の最も住みやすい所である。ヒマにあかして一首よんでみた。

「我庵は　都の北で熊も出る
よう住んどると　人はいふなり」

小入谷住人

教師一年生

山川　千江

89L

『テント下』『呉研究室』私にとってどちらも想い出深い場所です。友達と昼食を食べながら話をしたり、クラブの仲間と過ごした場所…。もうあのころには戻れないのですね。たった四ヵ月しか経っていないのに、ずっと昔の出来事のような気がしてなりません。

現在、私は京都のある府立高校で英語を教えています。女子校出身の私に共学校での生活は、大学で慣れてはいるものの、そう簡単ではありませんでした。最初の数週間は私の学生時代とのギャップや授業があるたびに出る生徒の問題に悩みました。しかし、最近ではようやく学校にも慣れ、授業中に余談をする余裕も出てきました。また、教室外で生徒と話をする機会も増え、この仕事がだんだんおもしろく感じるようになりました。先日、一学期を無事に終えることができました。ホッとしているのもつかの間、約一ヵ月後には、また元気でやんちゃな生徒たちとの戦いが始まります。不安はたくさんありますが、今から二学期が楽しみです。

新しい風をとりこんで

磯野　なつ子

89L

昨日、卒業後初めて大学を訪れた。アフリカ音楽の祭があったからだ。久々にわくわくどきどきした。プレイヤーの表情、観客すべてが最高だった。卒業してわずか四ヵ月だというのになにか忘れてしまっていたと感じた。胸の奥からこみ上げてくる感情、心の奥で感じるもの。精華はやっぱりいい。久しぶりに友人、後輩、先生、事務局の人たちに会った。なつかしい。みんな本当に大好きだ。

私は現在、食品の貿易会社に勤めている。仕事はもちろんおもしろいことばかりではないが、担当が大好物のイチゴとコーンで喜んでいる。

仕事以外ではパークレンジャーのボランティアを始めた。大阪府民の森を拠点に子供たちと一緒にキャンプやゲームをして自然を楽しむ。

社会人としての生活はまだ始まったばかりだが、私はこのように新しい風をとりこんで元気にやっている。

木野会の発展を願って

石川　久美子（旧姓　神山）

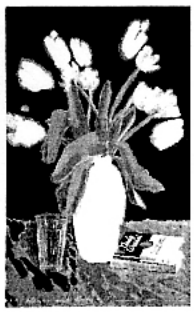
77E

一九七〇年代後期を精華で過ごしました。入学してから十六年もなります。当時は、田舎から初めて移りすんだ都会（といっても、かなり淋しい岩倉近辺であった）で、やっと自分自身の存在に気付き、自ら歩き出そうとしていたころでした。お金はないけど、毎日楽しく勉強も趣味もアルバイトも申し分なく、あれこそ青春の輝きではなかったかと、現実の日常生活の中にとっぷりと沈みきって時折、思いはせています。

卒業してからも毎年のように遊びに行っては、変わりゆく校舎や学生たちを見ました。時代の流れといってしまえば終りですが、さすがに英文科がなくなり大学に昇格？したときは、出身校の発展を思い複雑な気持ちでした。

私が個人的に大学、木野会にお世話になったのは、三年前の秋。まだ骨髄バンクができていないため、弟に合う型の骨髄提供者を見つけようと、大学の先生や、見ず知らずの多くの学生の皆さん、木野会の会員の方々に、協力していただきました。精華のつながりの中で足を運んだ方の多かったこと。いまも、感謝の気持ちでいっぱいです。紙面をかりて、御礼申し上げます。皆さん、本当にありがとうございました。

なんといっても、卒業生は精華の歴史に名を連ねているわけで、きっと愛着があるにちがいないと私は思っています。もっと木野会の会員が増えることを望みます。東北のはずれまで精華の名が届くことを期待しています。



小枝繁昭（71P）

住めば宮古

島尻　直美（旧姓伊計）

77D

ここは、宮古島、私の生まれた島沖縄本島から南へ、三角形をした島である。さとうきび畑に囲まれた職場、宮古養護学校、私の職場である。精神薄弱児の通う学校、私は美術担当で現在、中等部にいる。精華を卒業して十三年近くになる。あれこれしてきたようで、なにもしていないようで、自分が教職に就くなど、あのときは思いもよらなかった。それに障害児を教育するなんて自分の性格には、合いそうもない仕事、それを十三年もやっているから不思議である。その間には、結婚もできたし、夫ももてた。子供も三人、それに病気も二度、引っ越し五度、転勤二度やった。あれこれ、いろいろなことがあったけれど仕事は「やめよう」とは思わなかった、考えなかった。仕事に家庭、結構、楽しく、くよくよせずにやれたからだと思う。それと、お給料も入ってくるので、「がんばろうー」。と思っていたのかもしれない。最近二度目の転勤でそろそろ公立の中学校へと希望していたのだが、かなわず、再び養護学校へ、それも前任校への転勤である。そう、私は出戻ったのです。そして、精薄児教育十三年という、年数になってしまった。　（この世界のプロなのです。（本人はそう思っている）

転勤は、実にドラマチック物語で思いもよらない所から、話がやってきて、頭から冷水をかけられた状態にしてしまう。それと同時に、ドンドンとタイコの音のような心臓。「どうしよう」の文字が浮かび消えてゆく、沈黙のあと、「どうしたらいいのだろうか」…しばらくして実行へ。一度目の転勤は、夫の転勤に伴って沖縄本島へ海を越えてである。なんとかがんばって、一緒に行けた。

六年後、二度目の転勤は、宮古島へ、再び一緒にと思ったが、いろいろとあり別居かと思うところで、なんとかまた一緒にできた。私たちは、いつも一所懸命に動いた（本当によくがんばる）その結果、一緒に暮らすことができ、私は今の職場に落ち着くことができた。転勤は、二度としたくないと思っても必ず再びやってくる。でも、私は、この仕事が好きなので辞める気はない。（今の気持ち）家のこと少し、お父さん（夫）が、高給料を運んでくれたら、私は家にいて、のんびりビールでも飲んで好きなことして暮らしたいナアという。疲れたら、腰が痛い、足が、頭が…と訴える。ダンナ様や子供にいろいろと手伝いをさせる。家事はみんなでやりましょうという。私は仕事を持ってるからー。大変よー。と、さわぐ！わめく！体中で家族に伝え、皆を動かせる。気が付くと、学校と同じことを家でもやってる、家族を教育してしまう。あーまたやってしまったと反省する、こんなドタバタ朝からやってるので、家はさわがしい、明るい家庭から、ほど遠い忙しい家族である。父ちゃんも母ちゃんも、息子も娘も右に左にとまいて準備する。支度する、次の行動を考える、そして出かけてゆく。夏休みも、レクリエーションも買物も私たちは団体行動である。ワイワイ、あれほしい、ここに行きたい、なにが食べたい。全部まとめて一緒にすませる。時間がないからそうする。だから、さわがしく、忙しい。しかたがない。

母ちゃんは、仕事しているからねーと、最近とっても気持ちがいい。平凡が一番いい、きのうとかわらない生活が今日もできることが一番いい、と思う、のんびりと、穏やかで（忙しいが）そう変わらない毎日がいいと思う。

気持ちがやさしくなれてきた気がする。島の生活は、私にあっているからかもしれない。すめば、みやこ。ここが私にはピッタリだ。

二十二年ぶりの精華

立花　正寛・京子

69D

今年の夏、卒業後二二年ぶりに精華を尋ねてみました。

「木野通信」等で知ってはいましたが、なんと大きく成長したことでしょう。二十二年前の私たちのキャンパスは、本館、一号館、二号館…と、小さな食堂との七棟、広場としか見えないグラウンドとが、木野の山奥に点在していたのですから。現在のキャンパスを見れば、精華の二二年の重みはしっかりと感じられます。

当時、開校二年目、まさに従来のものとは異質な大学をつくり出そうとしていました。教職員と学生との間にも新しい関係がありました。

現在の教授の方が三〇代から四〇代のときですから、いかに、意欲溢れ、エネルギッシュであったか、私たちの身にビンビン伝わってくるのです。自主的な活動、囚われのない自由な発想の中、私たち二人は、デザインを学びました。しかし、卒業後は、土と出会い、ノルウェーで釉薬の研究をし、陶芸の道に入りました。入ったといっても、一本道ではなく、いろんな出会いを大切にし、考古学の分野、建築の分野等、あらゆることにかかわってきました。もちろん、四百有余年継承されてきた寺の法務もおこなわなければなりません。

何事もそうだと思うのですが、一つだけの世界からは、すばらしいものは生まれません。いろいろな分野への好奇心と探求心を持ち続けること、そして、自分は『プロ』なのだという根性が、作品を魅力あるものにするのではないかと思います。やはり、精華の自主性を重んじる気質は、卒業して『プロ』になったとき大いに発揮されるものと思います。

精華大学が、開校から現在まで、この精神を貫かれていることを頼もしく誇りに思います。これからも、どんどん、精華の仲間が増えていくことを期待しています。

敦賀より

今村　麻果（84D）

木野会会報

次号から会員のみに配布

もう、木野会に入会していただいているでしょうか？　今回の創刊号は木野通信と同封することにより、全卒業生に送られることになりましたが、同窓会木野会会報は、次号から会員の皆さんのみに配布します。まだご入会いただいてない方は、この機会にぜひご入会ください。

●入会方法

郵便局備付けの振込み用紙に学籍番号（入学年度、学部、学科名）、住所、氏名（旧姓）を記名の上、終身会費一万円をお振込みください。

口座番号　京都　0・42332
金額¥一〇、〇〇〇
京都精華大学同窓会木野会

第六回　木野会総会ご案内

と　き：一九九三年十一月三日（水）
午後二時～
ところ：京都精華大学・明窓館
懇親会　午後二時三〇分～五時　春秋館

大学では例年通り『木野祭』開催中です。木野の紅葉もあざやかなころではないでしょうか、久しぶりにお友達を誘って叡電に乗ってみてください。

◆編集委員会からのお願い

会報の名称・表紙デザイン大募集！

賞金付

「ユニーク」「自由」といわれ続けた我ら京都精華大学。その理念を背にしょって、このたび同窓会報を発刊いたしました。そこで、大々的に会報の名称・表紙デザインを卒業生の皆さんから募集します。創刊号では、王前謙氏に、工事中のイラストをデザインしていただきました。次号からは、あなたの作品が、会報の表紙を飾ります。このチャンスにぜひ、あなたも、チャレンジしてください。

●応募方法

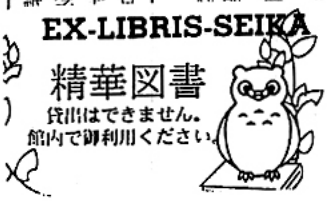
名称／サイズ
縦五cm×横十七cm以内
考えていただいた名称を、字体・フレーム、ともどもデザインしてください。
（●お断り　次号より名称のみ使用させていただきます）

表紙デザイン／サイズ
縦十八cm×横十七cm以内
イラスト・写真・…
は一色刷です。名…
ザインもOK！

締め切り／平成六年

表紙に採用された二部れぞれ金一封が贈られ応募ください。

宛先：〒六〇六　京
木野町一三七
京都精華大学
「表紙



編集後記

お待たせいたしましたが、設立六年目にして第一号をやっとお届けすることができました。これも快く原稿を書いてくださった皆様のお陰と編集委員一同、心より感謝いたしております。同窓会に寄せる思いはさまざまではありましょうが、この誌をとおしてもしかしたら新しい発見があればと願います。第一号では広告を扱うことができませんでしたが、次号よりは皆様の広告を募っていきたいと思っています。また、近況やメッセージ、イラスト、ご要望なども、どしどしお寄せいただきたいと思います。今回、行間を飾ってくれた素晴らしいイラストは卒業生の皆様の作品の一部を使わせて頂きました。

●お願い

卒業生宛の郵便物が転居、住居表示変更などのため返送されてくる場合がかなりあり、多くの卒業生が消息不明のままになっています。お友達の中で、この会報や『木野通信』等が届いていないという方はいらっしゃいませんか。そんな場合は、ぜひ同窓会「木野会」事務局まで、その方の氏名（学籍番号）と変更された住所をご一報ください。
また、問い合わせ等がございましたら、ご遠慮なく「木野会」事務局までご連絡ください。

編集委員

〒六〇六
京都市左京区岩倉木野町一三七
京都精華大学同窓会木野会（総務課）
TEL〇七五七〇二五一三一